2. 農業開発の歴史

2. 1　矢吹ガ原開拓の歴史

「矢吹ガ原」地域は、隈戸川流域の東側に広がる低平地と丘陵地を指し、江戸時代以前は、荒涼とした土地が広がっていたと伝えられる。

開田が進んだ矢吹ガ原台地（昭和48年）

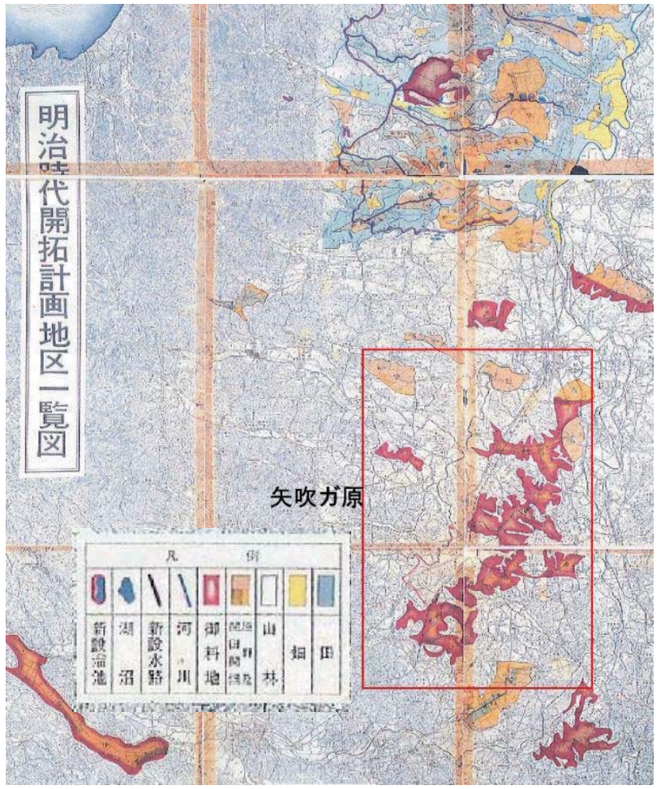
○本地域が「矢吹ガ原」と呼ばれるようになるのは、御料地・御猟場が開設され、その中心にある矢吹村を総称するようになった明治中期からである。このころから、本地域の本格的な開発が始まった。

○明治11年、明治政府は士族授産のため開墾を開始。矢吹が原にも16戸が 入植した。

○明治13年、宮内省は六軒原に欧米型大型農場経営の実験農場 として、約600haの直営農場を開設。のちに 大部分を御料地とした。

○こうして開発の第一歩が踏み出された 。しかし地味が悪く、用水不足のため思うようには収穫が上がらず、入植者達の生活は困窮を極めた。

○このような中で、明治18年、星吉右衛門は県令代理に宛て「西水東流構想」を建白したが、取り上げられず、その後、明治30年にも猪苗代湖から引水する計画を提出したが、取り上げられなかった。



西水東流構想

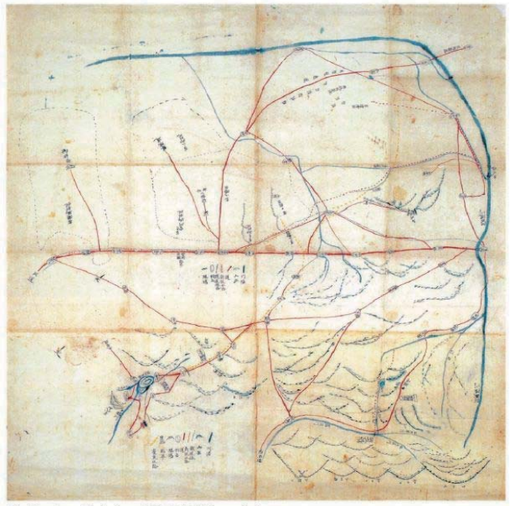
現矢吹町大和内の庄屋の次男として生まれた「星吉右衛門」翁は、明治18年、子孫のために豊かな農業の基礎を築き上げようと、痩せた原野の矢吹が原を肥沃な農地にするための壮大な構想を打ち立てた。

それは、日本海に注ぐ阿賀野川支流の鶴沼川にダムを建設し、その水を東の矢吹ガ原台地の農業用水に使うというものであった。

星翁はその趣旨を「建白書」にまとめ、福島県大書記官に提出したが、莫大な費用を要するなど、時期尚早と判断され実現には至らなかった。

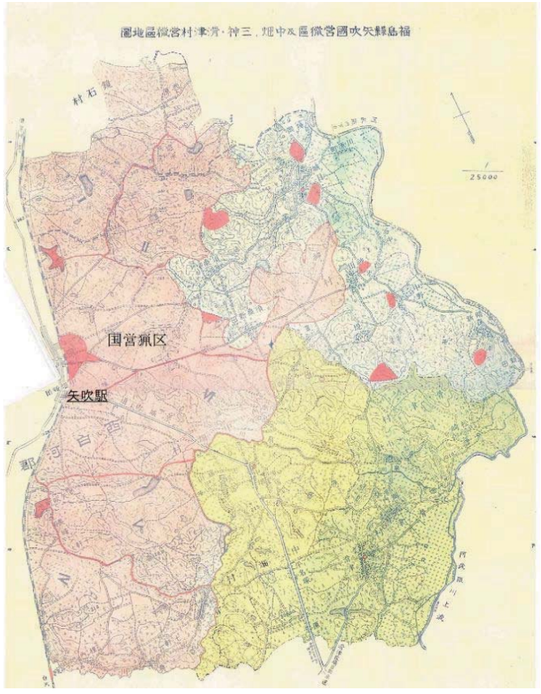
そして、星翁は「西水東流構想」 の実現を見ることなく、明治41年に79歳の生涯を閉じた。

星吉右衛門翁



星翁による建白書の絵図（明治18年）

○明治23年、宮内省による開墾事業は、資金・用水の不足などから打ち切られた。その後の御料地は民間に貸与され、多くは御猟場となった。現在は、日本畜産株式会社を経て、岩瀬牧場になっている。



福島県国営矢吹猟区及中畑、三神、滑津村営猟区地図